世代を紡ぐ道しるべ ①

～元海上保安官のひとりごと

中島敏

今号から毎号にわたり第44代海上保安庁長官、中島敏さん（65）のエッセイ「世代を紡ぐ道しるべ～元海上保安官のひとりごと」をお送りします。中島さんは昭和54（1979）年、海上保安大学校卒。海上保安監などを経て平成28（2016）年6月、長官に就任し同30年7月まで務めました。貴重な体験談をまじえた、海保職員らへの激励やアドバイスなど「海保愛」に満ちた「ひとりごと」をお楽しみください。（編集部）

道は拓ける

平成30（2018）年7月に海上保安庁を退いた中島です。海上保安協会の宮野直昭常務理事に「現役に一言」とおだてられ、執筆を引き受けることとなりました。金言を持ち合わせているわけではありませんが、折角いただいた機会、過去作成した題材をベースに修正を加えつつ、書き進めたいと思います。一部の方々には繰り返しになる内容となりますが、その点ご容赦ください。

さて、私は昭和31（1956）年に福井で生まれました。中学、高校と6年間、勉強もせず、軟式庭球に明け暮れていました。昭和47（1972）年に沖縄が返還、翌48年に復帰を記念した若夏国体が開催、青天の霹靂（へきれき）でありましたが、この国体に軟式庭球の福井県代表として参加することとなりました。旅程は、往路が大阪まで鉄路で、その後、大阪から飛行機で沖縄へ。もちろん飛行機に乗るのは初めてで、とても緊張したのを覚えています。

福井県代表とのこともあり、張り切って試合に臨みましたが、残念ながら全国のレベルは極めて高く、一勝もできず、失意の中、帰路につくこととなりました。帰りは予算の関係でしょうか、なぜかフェリー。当然、船旅も初めてで、一勝もできなかったことは直ちに上書きされ「優雅な船旅をエンジョイするぞ！」的な気持ちで乗船しました。

ところがどっこい、現実はそれほど甘くはありません。那覇港を出港し、防波堤を過ぎた途端、フェリーは大時化（しけ）の海に放り出されます。優雅な船旅どころではなく、吐きっ放しの40時間、船酔いに苦しむ地獄のような旅となりました。今の私ならば「金輪際、船なんかに乗るものか！」と思うのでしょうが、当時はまだ高校2年生、若気の至りでしょう、「男がこんなんでは情けない」と、自らを叱咤（しったし）激励、帰郷後、某OB社の受験雑誌、KS時代をぱらぱらとめくり、国公立でもない、私立でもない、各種学校に分類されていた海上保安大学校を見つけて受験、何とか入校することができました。もちろん、「給与支給」が大きな魅力であったことは言うに及びません。

部活で軟式庭球をやっていなければ、昭和47年に沖縄が返還されていなければ、その翌年に国体が開催されなければ、海が時化ていなければ、そして何より、情けないと思わなければ、海上保安庁には入庁しておらず、結果、今回執筆する機会にも恵まれなかったことになります。

一つ一つその瞬間をとらえると偶然の産物のようにも見えますが、この積み重ねの中に自らの意志があり、それによりもたらされる今この瞬間は必然です。皆さんも縁を大切に、今その瞬間に全力で取り組んで下さい。必ず道は拓（ひら）けます。

（第44代海上保安庁長官）

＝つづく